

Society5.0で実現する超スマート社会を 目前に私たちの変化を考える

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 **安家 周一**



地球の状況は気候変動も含めて、誰も正確な予測が難しい未来が待ちかまえているのでしょうか。先日も報道で、南の島に限らず台湾も海面の上昇で、毎年5.7センチメートル沈下しており、近い将来は台北で生活するのが難しくなる可能性があるとの報道がありました。また、地球の人口が80億人を超え、食料、水、大気、エネルギーが不足するとの警告が発表されています。多くの人が、なんだか不安だけれども、毎日追われていて、余裕がないで済ましているようにも感じます。未来からの借りものであるこの地球を今後も維持するためには、前号(まなびの広場12月号VOL.4)にも取り上げた一人一人のエージェントが求められるのでしょうか。国の各機関ではSociety5.0の社会の到来を目指して、社会全体の様相を変化させようと目標を立て、それに基づいた教育体系の組みなおしなども始まっています。

これまでの社会の変化を振り返ってみると、Society1.0 = 狩猟採取社会(約2万年) Society2.0 = 農耕社会(約2000年) Society3.0 = 工業社会(約300年) Society4.0 = 情報社会(約50年) 時代の変化の速度はどんどん早くなっています。内閣府のホームページには、Society5.0で実現する社会として代表的な4つの変化が発表されています。

Society5.0で実現する社会

- 1/ 必要な知識や情報が共有されずに、新しい価値の創出が困難⇒IoTですべての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、新たな価値が生まれる社会
- 2/ 少子高齢化や地方の過疎化課題に十分対応することが困難⇒少子高齢化、地方の過疎化などの課題をイノベーションにより克服する社会
- 3/ 情報があふれ必要な情報を見つけ分析する作業に困難や負担が生じる⇒AIにより、多くの情報を分析するなどの面倒な作業から解放される社会
- 4/ 人の行う作業が多くその能力に限界があり、高齢者や障害者には行動に制約がある⇒ロボットや自動運転車などの支援により、人の可能性が広がる社会

上記のような社会の変化に対して、私たち、小学校入学前の保育や教育を担う立場の者は、どのような対応が必要なのか、立ち止まってじっくり考える必要があると

思われます。短絡的には、IoTなどの伸長によって訪れる社会に対応するため、伝達や文書などもデジタルで簡便にし、SNSなどが使えるように保育のなかで取り組むことも考えられますが、どうも違っているように感じます。それとは対極的にOECD(経済協力開発機構)などでも「主体的・対話的で深い学び」が幼児教育から小学校以降の教育で目指され、みんな一緒ではなく、個別最適な学習課題や環境を模索する現場が目指されています。また、今までの価値を転換する「ニューノーマルの教育」が提示されるなど、知識と技能を詰め込む教育から、それぞれ個人の資質と能力を大切に、より社会に働きかける学校像が提案されました。教師が決めて児童が従うではなく、学校に関わるすべての人が主体的に運営に関わるような過去にはなかった運営が提案されています。

小学校就学前の保育は、今まで大切にしてきた「一人一人の能力と可能性」を大切にしながらも、自分たちの見つけた課題を追求する「プロジェクト型」の活動が重要になります。一律の育ちをイメージするのではなく、様々な育ちの子どもたちに非線形な動的カリキュラムが必要となるのです。日々の暮らしや行事なども見直しが必要ですし、家庭や保護者との連携や評価についても模索が必要です。

当機構は今後も園長をはじめ教職員の資質向上を目指して研修コンテンツの整備に努めてまいります。研修対象も保育職に限らず、看護職や栄養/調理職、園の安全対策などにも拡張し、全国隔々の教職員の皆様に届けたいと考えています。